

Lua \LaTeX -ja ドキュメント記述用クラス

Lua \TeX -ja プロジェクト

2018/01/01

ltjltxdoc クラスは、ltxdoc をテンプレートにして、日本語用の修正を加えています。

```
1 %<class>
2 \DeclareOption*{\PassOptionsToClass{\CurrentOption}{ltxdoc}}
3 \ProcessOptions
4 \LoadClass{ltxdoc}
```

ltxdoc の読み込み後に luatexja を読み込みます。

```
5 \RequirePackage{luatexja}
6 \def\Cjascale{0.962216}
```

`\normalsize` ltxdoc からロードされる article クラスでの行間などの設定値で、日本語の文章
`\small` を組版すると、行間が狭いように思われるので、多少広くするように再設定します。
`\parindent` また、段落先頭での字下げ量を全角一文字分とします。

```
7 \renewcommand{\normalsize}{%
8   \setfontsize\normalsize\@xpt{15}%
9   \abovedisplayskip 10\p@ \@plus2\p@ \@minus5\p@
10  \abovedisplayshortskip \z@ \@plus3\p@
11  \belowdisplayshortskip 6\p@ \@plus3\p@ \@minus3\p@
12  \belowdisplayskip \abovedisplayskip
13  \let\@listi\@listI}
14 \renewcommand{\small}{%
15  \setfontsize\small\@ixpt{11}%
16  \abovedisplayskip 8.5\p@ \@plus3\p@ \@minus4\p@
17  \abovedisplayshortskip \z@ \@plus2\p@
18  \belowdisplayshortskip 4\p@ \@plus2\p@ \@minus2\p@
19  \def\@listi{\leftmargin\leftmargini
20             \topsep 4\p@ \@plus2\p@ \@minus2\p@
21             \parsep 2\p@ \@plus\p@ \@minus\p@
22             \itemsep \parsep}%
23  \belowdisplayskip \abovedisplayskip}
24 \normalsize
25 \setlength\parindent{1\zw}
```

`\file` `\file` マクロは、ファイル名を示すのに用います。

```
26 \providecommand*{\file}[1]{\texttt{#1}}
```

`\pstyle` `\pstyle` マクロは、ページスタイル名を示すのに用います。
27 `\providecommand*\pstyle}[1]{\textsl{#1}}`

`\Lcount` `\Lcount` マクロは、カウンタ名を示すのに用います。
28 `\providecommand*\Lcount}[1]{\textsl{\small#1}}`

`\Lopt` `\Lopt` マクロは、クラスオプションやパッケージオプションを示すのに用います。
29 `\providecommand*\Lopt}[1]{\textsf{#1}}`

`\dst` `\dst` マクロは、“DOCSTRIP”を出力する。
30 `\providecommand\dst{\normalfont\scshape docstrip}}`

`\NFSS` `\NFSS` マクロは、“NFSS”を出力します。
31 `\providecommand\NFSS{\textsf{NFSS}}`

`\c@clineno` `\mlineplus` マクロは、その時点でのマクロコードの行番号に、引数に指定された
行数だけを加えた数値を出力します。たとえば `\mlineplus{3}` とすれば、直前のマ
クロコードの行番号 (31) に 3 を加えた数、“34”が出力されます。
32 `\newcounter{@clineno}`
33 `\def\mlineplus#1{\setcounter{@clineno}{\arabic{CodelineNo}}%`
34 `\addtocounter{@clineno}{#1}\arabic{@clineno}}`

`tsample` `tsample` 環境は、環境内に指定された内容を罫線で囲って出力をします。第一引数
は、出力するボックスの高さです。このマクロ内では縦組になることに注意してく
ださい。
35 `\def\tsample#1{%`
36 `\hbox to\linewidth\bgroup\vrule width.1pt\hss`
37 `\vbox\bgroup\hrule height.1pt`
38 `\vskip.5\baselineskip`
39 `\vbox to\linewidth\bgroup\tate\hsize=#1\relax\vss}`
40 `\def\endtsample{%`
41 `\vss\egroup`
42 `\vskip.5\baselineskip`
43 `\hrule height.1pt\egroup`
44 `\hss\vrule width.1pt\egroup}`

`\verb` p_LA_TE_X では、`\verb` コマンドを修正して直前に `\xkanjiskip` が入るようにしてい
ます。しかし、`ltxdoc.cls` が読み込む `doc.sty` が上書きしてしまいますので、こ
れを再々定義します。`doc.sty` での定義は

```

\def\verb{\relax\ifmmode\hbox\else\leavevmode\null\fi
\bgrou \let\do\do@noligs \verbatim@nolig@list
\ttfamily \verb@eol@error \let\do\@makeother \dospecials
\@ifstar{\@sverb}{\@vobeyspaces \frenchspacing \@sverb}}

```

となっていますので、plcore.dtxと同様に\nullを外して\vadjust{}を入れます。

```
45 \def\verb{\relax\ifmmode\hbox\else\leavevmode\vadjust{}\fi
46 \bgroup \let\do\do@noligs \verbatim@nolig@list
47 \ttfamily \verb@eol@error \let\do\@makeother \dospecials
48 \@ifstar{\@sverb}{\@vobeyspaces \frenchspacing \@sverb}}
```

alxspmode コマンド名の\と16進数を示すための"の前にもスペースが入るよう、これらのalxspmodeの値を変更します。

```
49 \ltjsetparameter{alxspmode={"5C,3}} %% \
50 \ltjsetparameter{alxspmode={"22,3}} %% "
51 %</class>
```

mod@math@codes docパッケージでは、ドライバ指定の表示の部分における|の\mathcodeは"226Aになっており、これにより|が小文字のjで表示されてしまう状況になっています。改善するため、"207Cに変更します。

```
52 \def\mod@math@codes{\mathcode`\|= "207C \mathcode`\&="2026
53 \mathcode`\-="702D \mathcode`\+="702B
54 \mathcode`\:="703A \mathcode`\\="703D }
```